

## No. 1236 犬の盲腸（鳥取大学）

[動物] 犬、ウエスト・ハイランド・ホワイト・テリア、雄、8歳齢.

[臨床症状] 血便を主訴に来院、腹部超音波検査により腸重積を疑う所見、大腸内視鏡検査により盲腸が反転し結腸内へ陥入する所見が確認された。

[肉眼所見] 摘出された盲腸全長は、完全反転しており粘膜が表層に露出していた。粘膜には隆起病巣が散見され、横断面にて盲腸壁筋層から漿膜にかけて存在する径6mm程度の不整円形腫瘤を認めた。

[組織所見] 腫瘤は細線維状または平滑筋線維状の紡錘形細胞の増殖ならびに大小の動・静脈によって構成されていた。また腫瘤内には多数の神経線維束が近接して存在し、ときおり神経節細胞も散見された。紡錘形細胞の多くは $\alpha$ SMA陽性、これら細胞の周囲には膠原線維の沈着と少数の平滑筋様線維を認めた。一部の血管壁は厚さが不均一であり、拡張・蛇行していた。また腫瘤内には細動脈が増生していた。ヘモジデリン沈着、粘膜上皮細胞の過形成、陰窩拡張、粘液産生亢進も認めた。

[診断] 1. 筋層から漿膜における多数の神経線維束、血管形成を伴う紡錘形細胞増殖、2. 粘膜上皮細胞の過形成

[考察] 病変内に異物や病原体は認めず、また腹膜炎・漿膜炎に関連した所見にも乏しかったため、本腫瘤を過誤腫と考えた。本腫瘤はヒトの主に小腸粘膜下に発生する神経筋血管過誤腫に類似していた。しかし、報告数が少なく診断基準に曖昧な点があること、動物では発生報告がないこと、を考慮して、本症例の疾病診断を「反転盲腸にみられた神経筋血管過誤腫（疑い）」とした。提出症例の特徴は、盲腸漿膜側に発生したこと、盲腸反転（盲腸結腸重積）を示したこと、平滑筋束がやや乏しかったこと、粘膜の病変（過形成）が続発し血便を伴ったこと、である。なお、提出症例は手術後約1年経過しているが、予後良好である。集会では、1歳齢のビーグル犬1頭の類似病変の報告（第34回日本毒性病理学会学術集会、2018年1月、那覇市、演題番号P-72）が指摘された。（寸田祐嗣）

### [参考文献]

1. *Gut* 23, 1008-1012, 1982
2. *Virchows Arch* 440, 338-340, 2002
3. *Bulletin UASVM Veterinary Medicine* 71, 204-207, 2014
4. *Int J Surg Case Rep*, 26, 1-3, 2016